

# 南部九州の古い衣料 (第3集)

- 芭蕉布の現状 -

川 上 カズヨ

Traditional Clothes in Southern Kyusyu ( The 3 rd Report )

- The present State of Textiles from Plantain Fiber -

Kazuyo Kawakami

---

九州南部の南西諸島に連なる列島には、古い時代から島民の衣生活を支えてきた数多くの染織品がある。これらの染織品の中には、共通点を持った技法もあり、類似品も数多く生産されている。いずれも島内で採取可能な素材を用いて上質の物から粗なる物まで特有の染織品を生産してきた。特に島々に伝承されている技法は、独自の織りの文化を形成し、個性的な産物を産出してきた。その代表的な産物は大島紬、久米島紬、山原芭蕉布、読谷山花、琉球餅、宮古上布、八重山上布、八重山ミンサ - 織等である。しかし、これらの産物は、近代技術革命や生活様式の変化、後継者不足等の問題によってその生産率を低下させている。

今回は、こうした現状のなかで今日も伝統的な技法を駆使し、見事な芭蕉布を織り続けている与論島、竹富島、喜如嘉の織工程について考察を試みた。

Key words :

[芭蕉の伝来] [与論島の芭蕉布] [竹富島の芭蕉布] [喜如嘉の芭蕉布]

---

(Received November 4, 1999)

## 1. 芭蕉の伝来

芭蕉はバショウ科の大型多年生草木植物に属し、高さ3m以上にも伸長し、葉形は楕円の大型で四方に伸び2mにも達する。中国が原産と言われているが、熱帯、亜熱帯地方にも自生している。糸芭蕉は前述同様の植物であるが小型の実をつける。実は食用にはならない。幹は葉柄からなり、この葉柄から繊維を採る。幹の横断面は25枚程度の抱合半月形の輪層をなしているが特徴である。

芭蕉には、(1)花芭蕉・Musa Uranoscopos Lour. 中国南部原産の鑑賞用のものと、(2)実芭蕉・Musa paradi siaca L. インド原産の熱帯性で実は食用となるもの。通称バナナ。(3)糸芭蕉・Musa basjoo Sied. 中国原産の温帯性で繊維用の3種類があり、衣料用としては(3)の糸芭蕉が素材として用いられている。

---

鹿児島純心女子短期大学生活学科生活学専攻生活デザインコース (〒890-8525鹿児島市唐湊4丁目22番1号)

今日も琉球文化圏(奄美以南～与那国)に自生する芭蕉(リュウキュウイトバショウ)の伝来については諸説があるが、決定的な論考は見当たらない。岡村氏は芭蕉の伝来について「東南アジア文化圏から渡来し、沖縄で発生したとは考えにくい」と述べている。一方、辻合喜代太郎氏は「この糸芭蕉はもともと琉球の地に自生していたか、南洋の諸島からこの地に移植されたものであったか、このことについては今日尚いろいろな困難な課題を残している」と述べている。しかし、同項で伊波普猷氏の論考を取り上げ、「芭蕉『ヒィシャグ』とマレ - 語の芭蕉『Pissng』の共通性からして、14世紀～15世紀頃に糸芭蕉が南方からこの地に移植されたのだろう」と論考されている。また、多和田真淳氏の論考では、「芭蕉は在来種である」と考えられている。芭蕉伝来の経路についての決定的な論考は出ていないが、琉球諸島の自生状況から考察して外来種ではないかと推定したい。

琉球文化圏では14世紀頃から南方諸国との交易を拡大し、原料や技術面においても外来織文化の導入を図ったものと考えられる。

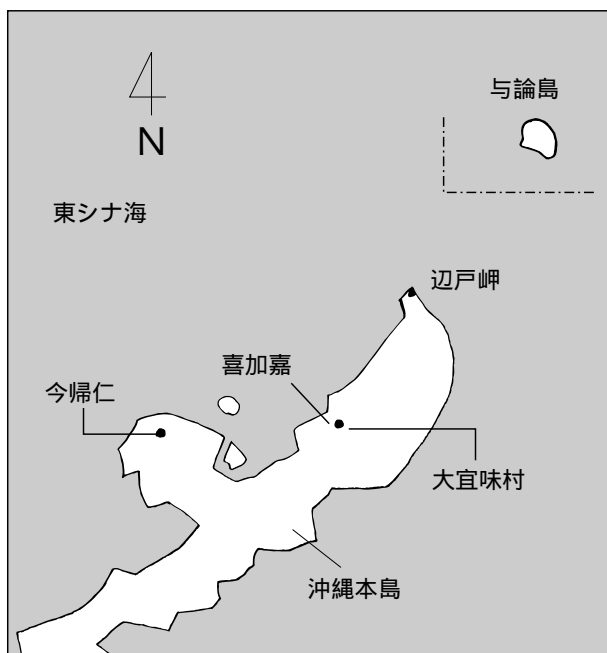
このように古くから庶民の衣料として、自給自足的に生産されてきた芭蕉布は、琉球諸島の気候風土に適し、晴れ着、平常着、仕事着として階級を問わず広く用いられ、諸島の特産物となっていた。しかし今世紀に入り、社会情勢の変化や文化の高度化によって次第に需要度を低下させ、生産力にも大きな影響を与えている。

## 2. 与論島の芭蕉布「バシャヌヌ」

与論島は奄美諸島の最南端に位置し、西は東シナ海、東は太平洋に面し周囲22km、東西に6km、南北に5km、標高97mの隆起珊瑚礁の島で平坦である。島を取り巻くリフとエメラルドグリーンに輝く海の自然が美しい。

沖縄本島の最北端辺戸岬へは28kmと接近し、晴れた日には北端部がよく見える。こうした地理的条件を捕らえた琉球北山王は15世紀初頭、与論島南部に小規模城郭を築き島を支配した。与論城跡は往時の面影を今日に残しその歴史を物語る。また、16世紀以降は薩摩藩によって統治され、明治期を経て今日にいたっている。

与論島の現状を1997年の「町勢要覧資料集」から見ると総人口は6,210人となっている。島の人口も昭和50年代をピークに減少傾向を示し、今回の調査でも60歳以上のしめる割合が29.3%と高く、高齢化社



与論島と沖縄北部



菊千代氏の糸巻き



精練した芭蕉糸束



与論島の芭蕉繊維



与論島の織り糸

会への変貌が現実のものとなっている。産業別では農業が第1位をしめ、サトウキビの栽培が主力である。島民の生活の背景にはこうした環境があり、必ずしも好条件に恵まれているとはいえない。自然環境の中での生産物が島民の生活を支える現況は厳しい。

琉球時代の芭蕉布は別称「夏布」「蕉葉」「雑紵」等の呼称もあつた。また、列島の方言では「バシャジン」「バシャシン」「バシャヌヌ」「バシャギン」とも呼ばれ今日でも通用する。古くから島民の衣料を構成してきたものは木綿、麻、芭蕉類であった。なかでも衣生活の大半をしめたのが芭蕉布である。島民は古くから芭蕉布で製作された衣服を“バシャヌヌ”と呼ぶ。今日では島内で芭蕉畑を見かけることも、「バシャヌヌ」を着ている人も殆どなく、野生化し

た芭蕉が山間に散在しているにすぎない。こうした環境の中で菊千代氏(昭和2年生)は芭蕉を栽培し、伝統的な技法を用いて芭蕉糸を採り純粋な芭蕉布を織り続けている。先代から受け継いだ伝統的な技法は千代氏によって継承され、優れた芭蕉布となって与論島の織の文化を今日に伝えている。

菊千代氏が採用している与論島の織り技法は、伝統的な技法が用いられている。その工程の第1は糸採り作業である。まず素材となる芭蕉(バシャ)選びから始める。芭蕉の収穫期は11~2月頃が最適期とされ、この季に外皮が枯れた状態になったものを選び、幹の直径が15~20cm程度の円筒形に伸長した芭蕉(均等な幹を作るために年に3~4回葉を落とす)を根元から約20cm残して鎌で倒し、長さ約120~130cmに切り揃える。切った芭蕉が乾燥しないうちに根元を上にして外皮から順次手で剥ぐ。外から内へ剥ぐ段階で用途を考え3種類に分けて束ねる。外(下質)「ウウ-ゴ-」は仕事着,テ-ブルクロス,暖簾等に用いる。中(中質)「ナ-ゴ-」は用途に合わせて着尺地,帯等を織る。内(上質)「ナ-グ」に分けて束ねる。芯に近い部分は上質の繊維が採れ最上の芭蕉布が織れる。芭蕉の頭部は円形になっているため4~5cm幅(口割)に切り込みを入れ縦に裂く。裂いた内皮2~3枚を重ね、根の方を中に入れ3つ折りにして1束にする。これを「バシャタバイ」と言う。

第2工程は、大釜(鉄製)の底に2本の縄を敷き,(引き上げ作業を容易にする)束ねた芭蕉をいれ木灰汁で煮る。ここで使用される木灰汁は,ガジュマル,アダン,ソテツの葉や実の殻等の灰である。アルカリ成分の強い木灰汁を用いる。内皮と外皮は煮る時間が異なるため分けて煮る。木灰汁の分量は,水量10に対し20%の灰汁を加えて強火で(沸騰の状態)2~3時間煮る。煮えた芭蕉の束を釜から引き上げ,芭蕉の葉を敷いた箆に取る。水洗いを充分に行ない,冷ましてから竹クダ(バシャピキクダ)で,1本1本丁寧にしごいて不純物を除き繊維にする。繊維は竹竿に吊るして陰干しにする。



与論島の芭蕉布  
菊千代氏の製作品



与論島の古い芭蕉布(仕事着)  
(サザンクロスセンター展示品)

第3工程は,乾燥した繊維(フ-)を上,中,下,粗の糸に分類し,手巻きで糸玉にして紐で吊るしておく。織り糸を作る時に吊るしておいた糸玉(フ-チグル)を1個ずつ水に浸し細かく裂く。芭蕉は乾燥すると切れやすい性質があるため水に浸す。裂いた繊維を機結びで織り

糸に紡ぐ。この作業を「ウミ」と言う。つないだ糸を糸車で経糸には7～8回、緯糸には3回の撚りをかけ織り糸にする。

第4工程は、束にした織り糸を経糸と緯糸に区別し“あく抜き”を行なう。この手法は一反当たり約1kgの米ぬかを用いて約15分間煮る。煮た後は水洗いを充分に行ない不純物を除くと繊維に光沢がでる。また、柔らかさと強さを増す。

第5工程は、こうして得た糸で地機や高機で織る。最上の着尺地1反(13m)織るには約21,000本の紡ぎ糸を要し、長さ約24,000mにも達する。先々代の菊ナへ氏は(嘉永6年生) = 1848 = 江戸後期から明治期、菊マコ氏は(明治28年生) = 1895 = 明治期から昭和中期頃まで地機を用いて織っていた。千代氏は高機を用いて芭蕉布を織っているが、先代が使用していた地機は与論島の民俗村に残されている。こうして江戸中期から受け継がれた技法は与論島において洗練されていたのである。

通常の芭蕉布(経糸、緯糸使用の場合)を織るためには成熟した芭蕉約60本(3年もの)を要し、その芭蕉から織り糸約1000gを採取する。更に上質の芭蕉布を1反織るには芭蕉約200本(3～5年もの)を倒さなければならない。1本から僅か5g程度の織り糸しか得られないからである。上質1反分の糸の使用量は約600～700g。その芭蕉布を織る箆幅は12算(ヨミ)(1算は40目)1算には上糸40目と下糸40目を必要とする。菊千代氏は12算を採用しているので経糸960本を引き込み、軽くて薄い最高の織物を織り出している。こうして完成する芭蕉布の全行程(すべて手作業)を独力で行なう場合は、糸採り約1年、織り1年、最高級品を織る場合には更に1年を加えている。完成するまで3ヶ年を要すると言う。上質の物には緋の絵柄が織り込まれている。緋の文様は小柄で単純なものが多い。なかでも枡形文様(チョ・バナ)と二条横線の組み合わせ文様は、菱形や山道文様となって晴れ着に相応しい文様と風合いを持っている。こうした織物も薩摩藩時代には献上物、御用布として織り続けた歴史がある。今日、上述のような江戸時代の技法を再生しながら困難な環境に挑戦している菊千代氏は、与論島の古い織り文化を今日に伝える伝承者としての大きな役割を果たしている。

### 3. 竹 富 島 の 芭 蕉 布 「バシャシン」

竹富島は八重山諸島に属し、石垣島から南方に約6km、島の周囲は約9kmの平坦な小島である。珊瑚礁の隆起によって出来たこの島は、コバルトブルーの海に囲まれ、島内は白い砂地で自然の景観が美しい。島の中央部には3集落があり、琉球瓦(赤瓦)で統一された琉球様式の平屋造りの民家は整然と区画され、珊瑚石の石垣に囲まれている。どの民家にも島の風物があり、特に家の周りの芭蕉とシ・サが竹富島の文化を象徴している。

竹富島の今日の情勢を1998年10日現在の調査(竹富島役場)でみると総人口は280人。世帯数は140世帯。その中で65才以上の占める割合は33.5%に達し高齢化社会の集落となっている。特に、児童数の減少が目だっている。このような現状のなかで、江戸中期頃より傳承されているミンサ・織り、八重山上布、芭蕉布がある。その代表的なものはミンサ・織りであるが、芭蕉布もミンサ・織りに次ぐものである。いずれも大量生産ではなく手工芸的な生産となっている。特に島仲由美子氏(昭和23年生)による芭蕉布は、先々代より繼承した技法を駆使しての産物



竹富島の集落と芭蕉

である。島民は今日でも芭蕉で出来た衣服を“バシャシン”と呼ぶ。島内で栽培された芭蕉を素材として芭蕉布が完成する。竹富島の芭蕉畑の面積は狭く、与論島の芭蕉や山原地方の芭蕉と比較して、伸び率がやや低い。地質に関係があるのであろうか。しかし芭蕉繊維の質的な差はない。竹富島で行われている芭蕉繊維の採取方法は琉球圏の手法と類似している。

島仲由美子氏の生産方法は古い時代から培われてきた技法を駆使して芭蕉布を織っている。琉球時代から江戸時代にかけて貢納布を織り続けた島民の歴史の中にその技は生かされていた。先代の野原ミツ氏の口伝によると、104歳で天寿を全うされた義母のウナヒト氏は、100歳を越えても糸を續んでいたと言う。庶民の生活に密着していた芭蕉布は、こうして一筋に織り続けられていたのである。竹富島では昭和前期頃まで民家のほとんどが機織りの伝統を持っていたと言う。戦後は（昭和20年以降）生活様式の変化、生産労働力の変化、既成服の普及等によって機織りも衰退していった。しかし、島仲由美子氏は、そうした環境の中で受け継いだ技法を今日も高機で生かし続けている。

竹富島の芭蕉布生産工程の第1ポイントは芭蕉の幹を均等に育成する事にある。幹の均一化を図るために、年に4～5回葉を落とす「葉留」頭部の「芯留」作業を行なう。これを「スラウチ」という。糸の採取期は冬季が最適と考えられている。植え付けから3年経過した芭蕉の葉を落とし、枯れた状態にしたものをこの季に伐採する。均一化された良質の繊維はこうして採れる。「庶民の染織」岡村氏の竹富島での繊維採取期は「冬に育ったものを夏に伐り、冬に育ったものは上物である」と記されているが、現地では夏期ではなく冬期に採取している。この冬季の短い期間に集中的に行なわなければならない採取作業は根気と忍耐力を要する過酷な作業である。

現在、竹富島で行われている芭蕉採取の第1工程は、与論島と殆ど同じ工程が行われている。しかし芭蕉を倒す時、竹富島では根元から10cm程度残して伐採するが、与論島で20～30cm残して伐採する。これは芭蕉の伸び率と関係しているからであろう。芭蕉の伸び率は琉球列島北限



竹富島の芭蕉布



竹富島のパイ

の方がよい。

第2工程は木灰の採集である。「オオハマボウ」現地用語「ユ・ナ」の木はアオイ科に属し常緑喬木で防風林、防潮林として島内に自生し、年間を通して採取可能なため多く用いられている。アルカリ性の強い木灰が得られ、第1工程の芭蕉を煮る溶液にも影響を与えている。良質の繊維採集はこの工程を完璧に行なうことにある。

第3工程の芭蕉煮は、前述同様の手法を用いている。特記すべき手法はない。

第4工程の糸しごきは、冷ました芭蕉の表皮を剥く作業である。用具は手作りの竹管のものを広く使用しているが、竹富島では“パイ”(鉄板)という長さ12cm、幅5cmの用具を使う。その用具を右手に持ち親指で押さえながら2回しごく。この作業を「バシャヒキ」「バシャピキ」ともいう。しごいた繊維は淡黄色の靱皮となる。それを陰干しにし、乾燥したら原繊維の糸玉(8~10cm)を作り吊るして保存する。繊維を作る時はこの原繊維を極細に裂き一本の糸に紡ぐ。芭蕉繊維のような靱皮繊維は、綿繊維のように紡ぐ必要はないが、細かく裂いた繊維を機結びにするか、撚り合わせにするかの方法によって長繊維にする。竹富島の糸紡ぎの手法は後者を採用している。若い時代から芭蕉織り、糸紡ぎ一筋に働いてきたと言う内間ヨネ子氏(72才)は、今日も最良の糸紡ぎを行なっている。

1本の糸の長さは、約110cm、1反分の紡ぎ糸は約20.000mにも達する。熟練を要する撚り合わせ手法は糸の結び目がなく、なめらかで織り全体にも影響を与えている。1反に要する最良の繊維は500~600g(芭蕉1本から僅か5g)を標準にしているが、完成まで長期間を要する



竹富島の位置

ため簡単には織れない。現在は高機を用いて竹富島の伝統工芸品として生産されている。完成した芭蕉布は再び精練されて芭蕉独特の光沢をます。記録によれば「織り上げた芭蕉布を石灰と海水で30分間煮た後“海晒し”を数時間行なう」とある。昭和中期頃までは“海ざらし”の手法によって漂白を行っていたが、最近は海の環境変化、観光ブームによって実施は困難な状況にある。生なりの地はだをもつ芭蕉布は魅力的な衣料であるが、綿布や化学繊維衣料の普及により、今日では着物として着装する人は殆どなく、特殊な用途、祭礼用、祭衣、民芸品等に構成されている現状である。

#### 4. 喜如嘉の芭蕉布

琉球織文化圏の中心は沖縄本島である。沖縄は亜熱帯圏に属し、その気候風土に適した芭蕉布は庶民の衣料として重要な役割を果たしていた。沖縄本島の北部、山原地方はその産地であった。山原地方を統治していた北山王の拠点は今帰仁であった。今日でも残塁が往時のグスク形態を実証している。この地方でも芭蕉布が盛んに織られていて今帰仁芭蕉布と称されていた。

琉球王国に三山王が成立すると中国との交易を密にし独自の文化圏を形成した。15世紀の初頭、尚巴志によって三山は統一され統一王朝時代が成立し、その王権は宮古、八重山、奄美にも及び琉球全域を統治するに至った。第二尚氏時代には首里城を居城とし、中央、地方の官僚体制を整え、中国との交易をさらに強化し、東南アジア圏へも進出し琉球黄金時代を築いている。

琉球王国は17世紀初頭、島津藩の侵攻を受け幕府の体制下に置かれ、貢納物、献上物を上納する時代もあり、また、日本文化の影響も受けた。明治期にいたって廃藩置県が施行され、琉球王国500年の歴史は閉じられたが、上述の文化背景のなかで培われた琉球織物文化は、多彩な織物工芸を産出していたのである。

辻合喜太郎氏は、明王朝時代の〔琉球芭蕉布〕記述のなかに「生熟蕉布」があつたことを解明し、生熟蕉布とは高級芭蕉布を意味していると述べている。明王朝時代に優れた芭蕉布が琉球王国から貢納されていた記録は、当時の琉球織物技術のレベルを示すものである。

琉球民族の生活必需品であつた芭蕉布も時代と共に変化し、昭和時代には次第に衰退し絶滅危機にあつた。その絶滅の危機にある芭蕉布を存続させようと地道な努力を続けたのが平良敏子氏の祖父平良真祥氏である。その遺志は次代の平良真次氏（明治24年生）に受け継がれ、今日活躍中の平良敏子氏に継承されて伝統工芸の高域に達している。

平良敏子氏は大正9年（1920）大宜味村に生まれ幼少期より芭蕉の文化に触れていた。その素地は昭和20年（1945）以降に生かされる事になる。平良敏子氏は第二次世界大戦によって壊滅状態になっていた芭蕉布の復興に力を注ぎ、昭和38年（1963）本格的な芭蕉布織物工房を開き、その後は優れた工芸品の出品によって受賞を重ね、昭和47年（1972）県指定無形文化財「芭蕉布」保持者としての認定を受け、さらに昭和49年（1974）「喜如嘉の芭蕉布」として国の重要無形文化財としての認定を受けている。現在、喜如嘉の芭蕉布は「喜如嘉の芭蕉布保存会」11名の会員（平成5年現在）によって継承され、年間約200反の産出は少数人員約20数名の最高の技に他ならない。平良敏子氏の集計（平成5年発行のもの）による芭蕉布生産の推移をみると、昭和32年の





芭蕉布単衣



喜如嘉の芭蕉



剥いだ内皮を束ねる



木灰汁で煮る

664反をピ - クに減少傾向を示している。これは生産技術保持者の高齢化、後継者の問題が大きく影響しているものと思われる。

今日も山原地方を代表する喜如嘉は、東シナ海に面した本島北部で山林に囲まれた耕作面積の狭い盆地にある。平良敏子氏の工房周辺には約1000坪余の芭蕉畑があり、良く手入れされた芭蕉が育ち栽培されている。ここで栽培された芭蕉を素材にした生産工程を上述の2島と比較

しながら考察してみたい。

与論島の菊千代氏は、工程の基本は沖縄から学んだという。沖縄北部と与論島は接近しており技法の交流に問題は生じなかったものと思われる。殆どの工程と用具が同一である中で木灰をとる材木が異なる。もう一つの異なる点は、最後の仕上げの段階で完成した芭蕉布をアルカリ度の高い木灰汁で精練した後、喜如嘉ではユナジ液に約2時間浸けて中和させる点である。ユナジ液とは米粥に米粉と水を加えて発酵させたもので成熟した液を使う。充分発酵していない液を用いると布の痛みが早いと言われている。与論島では第4工程の精練法が異なる。織る前の段階での束にした織り糸、経糸、緯糸を区別し木灰汁で精練する。その後米ぬかを用いて約15分間煮る作業を行なう。この点は大きく異なる。完成品をさらに薄く丈夫に仕上げるため、“海晒し”を行う技法も残っている。

竹富島の場合も殆ど同じ技法を用いているが、異なる点は糸しごきに用いる用具が竹管ではなく“パイ”と呼ぶ鉄板を使う点である。仕上げの段階では沖縄の技法を用いて精練し中和している。そして“海晒し”も行う。こうして1反の見事な芭蕉布が完成する。芭蕉は生来乾燥に弱く折れやすい性質を持っているため、織り工程では乾燥しやすい季節には高機のサイドに蒸気を立て織り環境を整えている。自然環境では雨の多い季節のときが織りやすいという。

## 5. 要 約

今回の芭蕉布現状調査によって芭蕉布が琉球諸島の文化と歴史に深く関わっていたことを考察できた。琉球王国の繁栄と共に芭蕉布も上層下層を問わず広く着装され、その為に需要度も増し、織りの技術も普及していった。庶民は染織技術を習得すると同時に交易のもたらす様々な文化に触れていたのである。

17世紀初頭薩摩藩の支配下に置かれた琉球諸島は、沖縄以南と以北に分割され、奄美、喜界、沖永良部、与論は薩摩の直轄領となり、税制による貢納物の課税は重い課税となっていた。人頭税の実施は、寛永14年(1637)以来、明治35年(1902)まで260余年の長きに及んだ。八重山に割り当てられた反物は[芭蕉布3,000反, 上布6,000反, 下布10,000反](草木布・先島で織る布)また[白上布226反, 白中布46反, 白下布2,273反]合計4,545反(日本原始織物の研究・貢納布)の貢納布が毎年課せられていた。人頭税の他に尚王家の御用布の献上物もあった。こうした人頭税の厳しい措置は二重、三重に島民の生活を苦しめ、貢納布は重税であった。

小川学夫氏は“シマウタ”の一節に[芭蕉布]の歌を紹介している。“正月にヤバシャギン着ちも、節子(地名)のとみ貰て給れ”また“吾きゃが肩落てバシャギンぐわよ、引っ張ってくんな 破りらしゅんど”とある。正月に芭蕉の着物を着ていても、嫁に貰って下さい。また、私の肩が落ちた芭蕉の着物を引っ張ってくれるな、破れてしまうよ。と言う島民の苦しい生活の一端が歌われている。芭蕉布は粗悪な布の代名詞のようにも使われているが、一方では神事を行なうノロ(女性)の芭蕉布は最高のものが選ばれていた。

このように過酷な時代を経た島民は、自給自足的な衣料を生産し苦しい生活に耐え、徐々に定着した技法を後世に伝えていったのである。

今回の与論島の菊千代氏、竹富島の島仲由美子氏、喜如嘉の平良敏子氏の芭蕉布織り工程を

考察する時、その背景に連綿と流れた先代の遺志の継承がある。三者とも祖父母時代から三代の織りを体験し、芭蕉布の魅力を得ている。こうした環境の中において伝統工芸の継承があり、今日の芭蕉布生産の原動力となっている。

今回の現地調査にご協力を賜った菊千代氏、島仲由美子氏に、また、喜如嘉の工房に深く謝意を表したい。今後も西南諸島の伝統工芸の現状把握に努め、伝承の経緯について研究を進めていきたい。

#### 引用・参考文献

- (1) 上村六郎 「沖縄染織文化の研究」(3) 第一書房 昭和57.9.
- (2) 同上 「沖縄の色彩及び染織と民族」 衣生活研究会 昭和46.11.
- (3) 岡村吉右衛門 「庶民の染織」(上下巻) 衣生活研究会 昭和51.11.
- (4) 同上 「世界の染織」 衣生活研究会 昭和55.10.
- (5) 同上 「日本原始織物研究」 文化出版局 昭和52.3.
- (6) 辻合喜代太郎 「琉球芭蕉布」(上下巻) はくおう社 昭和47.11.
- (7) 沖縄県 「沖縄の染織」1 染織編 沖縄県教育委員会 平成9.7.
- (8) 沖縄県立博物館 「芭蕉布と平良敏子」 沖縄県立友の会 1996.8.
- (9) 新川明 監修 「琉球染織「手技」の輝き」 日本放送出版協会 1996.1.
- (10) 喜如嘉の芭蕉保存会 「喜如嘉の芭蕉布」 大宜味村教育委員会 昭和59.3.
- (11) 平良敏子 「平良敏子の芭蕉布」 日本放送出版協会 1998.8.
- (12) 監修 宝玲叢刊編纂委員会 「琉球風俗絵図」 本邦書籍(株) 昭和57.3.
- (13) 竹内淳子 「草木布」 法政大学出版局 1995.7.
- (14) 中江克己 「日本の染め織り」 紀尾井書房 昭和57.5.
- (15) 同上 「染織事典」 秦流社 1996.8.
- (16) 琉球新報社 「尚家継承琉球王朝文化遺産展」図録 1993.1.
- (17) 日本トランスオ - シャン航空 「工芸の島」若水号67 1998.3.
- (18) 日本風俗学会誌 「日本風俗史事典」 弘文堂 平成6.2.
- (19) 飯田正毅 「薩摩の伝統工芸」 春苑堂出版 平成7.9.
- (20) 上村六郎・他 「日本染織辞典」 東京堂出版 昭和57.6.
- (21) 河鱈実英 「日本服飾辞典」 東京堂出版 昭和44.4.
- (22) 小川安朗・他 「被服学辞典」 朝倉書店 昭和52.5.
- (23) (株)紫紅社 「染織の美」18 沖縄の織物 京都書院 昭和57.8.
- (24) 沖縄県商工労働部 「沖縄の伝統工芸」 観光文化局 平成7.8.
- (25) 小川学夫 「奄美シマウタへの招待」 春苑堂出版 平成11.8.
- (26) 写真資料 与論、沖縄、著者撮影 1998.3.
- (27) 写真資料 石垣、竹富島、筆者撮影 1999.3.
- (28) 菊千代 「物とくらし」 日本観光文化研究所 発行年月日不詳
- (29) 与論町 「町勢要覧資料」 企画調整課 平成9.11.